

## 『武功夜話』の文芸的研究

松 浦 武

# A Literary Study of Maeno Katsukane's "Buko-yawa"

Takeshi MATSUURA

In Japan the first constitutional government modeled after that of China was established in the seventh century, and the writing system using Chinese characters was widespread among the court aristocrats. In this respect Japan was comparatively behind other nations in the history of the world. Once the Japanese had acquired the proper writing system, the creative writing of poetry with a marked individuality and other rich forms of self expression using prose such as stories, novels, diaries, essays, etc. flourished, which has continued through the twentieth century. In the history of world literature it is a distinctive phenomenon that a creative literature of expressing personal behavior and psychology flourished in the early stage of a nation's development.

In the Japanese history of literature, this personalism seems to have temporarily disappeared during the turbulent period which lasted from the fifteenth to the sixteenth century. However, *Buko-yawa* (The Night Tales of Military Exploits) published recently proves that the existence of this personalism is such a deeply rooted, long-continuing tradition of Japanese literature.

《親を失い妻子と別離、集合離散は乱世の像と存知候。》(巻一)

《勢家に媚び、利に奔るは人情の然らしむるところ、是非なき事に候。》(巻十九)

〈織田信長(一五三四年出生)や豊臣秀吉(一五三六年出生)の幼少年期から、関ヶ原の戦い(一六〇〇年)、徳川幕府の成立期にいたる時代に、すぐれた文芸作品が存在しない〉というのは、大体において、日本文学史の通説といってよいただろう。美術史にはすばらしい所産が見られるのに、文芸に秀作が存在しないというのである。その間には、誰もが知っているように、おびただしい数の戦闘がおこなわれた。少し例をあげると、斎藤道三の美濃国押領、織田信長軍団による尾張国内の内戦、信長と今川義元の桶狭間合戦、信長による稻葉山城の再三にわたる攻撃、姉川の合戦、長島一揆、信長の比叡山焼打ち、石山本願寺攻撃、武田氏と戦った長篠の戦い、信貫山城・上月城・三木城の攻撃、本能寺の変、豊臣秀吉の山崎合戦、賤ヶ岳の戦い、四国・九州制圧、小田原征伐、朝鮮侵略から関ヶ原の合戦、徳川家康の大坂城攻撃にいたるまで、文字どおり列挙にいとまがない戦闘の時代、乱世の時代なのである。そして同時に、それに呼応した、おびただしい数の《戦国軍記》が書かれている<sup>註</sup>。だが、それにもかかわらず、この華々しい戦乱の期を、リアリテイをもって、ヴィヴィッドに描きえた作品は、きわめて稀である。

ところが、このころ『武功夜話』という大部な作品が、世に出た。織田信長や豊臣秀吉、徳川家康に〈同時代者として直接かかわった愛知県江南市前野の地侍たちによる体験記録〉を基に構成した作品である。こんな優れ

た作品が、地方の土蔵の中に、長い間ねむっていたのだ。門外不出の書だったのである。

日本人は異常に早くから、かつ、持続して多くの文芸作品を書きつづけてきた。七世紀に律令国家が成立し、漢字が普及して以来、二〇世紀の今日まで絶え間なく詩を作り、広い意味で小説と呼んでいい文章を書きつづけてきた。こうして多量の作品群が、輝かしい日本文学史を形づくっている。そこに、われわれは〈個人の詩的抒情の形象化〉〈個々の人間のさまざまな生きざまの叙述〉を見ることができるのである。これは例えば、ドイツ・フランス・イギリスの文学史と違った様相である。どうして、このような特異な文学的現象が起きたのであろうか。

中国人は、日本人が著作を始めるより一千年も前から、たくさんの著作を書いてきた。その影響はもちろんあるが、しかし、その基本的性格が非常に相違している。私は、日本文学が早くから独特の発展を遂げた原因を、日本に特異な個人主義、〈日本型個人主義〉が発達し、それが日本人の伝統と化したからだと考え、その精神構造が、日本文学史の諸作品を特徴づけていることを、しばしば述べてきた。

周知のように、信長や秀吉には『信長公記』（太田牛一）、『信長記』（小瀬甫庵）、『太閤記』（小瀬甫庵）のように、信長・秀吉から遠からぬ時代に制作された伝記作品が存在している。だが、これらの伝記作品は、たいへん素朴であるうえに、英雄の、英雄たるゆえんが強調された反面、人間的眞実の洞察と表現に欠けるのである。そのため文芸として、傑作たりえないのだ。それと対照的に、前述の『武功夜話』は実にいきいきと、戦国乱世を生きた人間たちの動静や人間としての眞実を形象化して見せているのである。それは、日本型個人主義の見事な顕現といっていい作品である。傑作不在と思われた時代にも、やはり秀作はあったのである。以下、この拙論で述べるのは、『武功夜話』の傑作たるゆえんについて、である。つまり、『武功夜話』の文芸的研究であつて、歴史学的研究ではないことをことわっておきたい。

## 1

《爰に後陽成院之御宇に当て、太政大臣豊臣秀吉公と云人有。微小より起り、古今に秀て、寔に離倫絶類之大器たり。其始を考るに、父は尾張國愛智郡中村之住人、筑阿弥とぞ申しける。或時、母懷中に日輪入給ふと夢み、已にして懐妊し、誕生しけるにより、重名を日吉丸と云しなり。襁褓之中を出でてより、頼み稀なる稚立にして、尋常之嬰兒にはかはり、利根聡明なりしかば、出家させ、禅派之末流をも統ぜ、松林之五葉を昌んにせばやとて、八歳之比、同国光明寺之門弟となしけるに、沙門之作法には疎く、世間之取沙汰等には、十を悟れる才智世に勝れ、取分、勇進之物語をば、甚だ以てすぎ給ひつゝ、稚心にも、出家は乞巧之徒を離れざる物をと思召、萬雅意に振廻給ひ、僧共にいとはればやの心なりしかば、案の如く、いやいや此の兒之氣分は、中々沙門とは成ずして、還て仏法之碍をなすべしと、衆議一決し、父の方へぞ送ける。日吉殿父が折檻せん事を恐れ、追出しつる坊主共を打殺し、寺々を焼払ふべしと、ことごとしく怒り出でられしを、彼僧共、重部とは思ひながら恐れをなし、うつくしき帷・扇などを送り、機嫌を偈ひにけり。父本より家賃しければ、十歳の比より人之奴婢たらむ事を要とし、方々流牢之身となり、遠三尾灘四箇国之間を經廻すと云共、始終、春秋を一所にくらす事もなかりしは、偏に、氣象人に越、度量世に勝れたる人なれば、寔に奴隸之手に恥しめられざるも理なり。何事も寛仁大度にして、物ごと大やうなれば、渥洼之麒麟見之如しと、世に諷しけるも亦不宜乎。》（『太閤記』巻第一）

これは『武功夜話』ではなくて、『太閤記』における豊臣秀吉出生と幼年期のエピソード叙述です。偉人の誕生には、しばしば神秘的現象があらわれます。『太閤記』によれば、秀吉も例外ではなかったのです。『武功夜話』

で、これに呼応する話題を示すと、それは次のように描かれています。

④この人、弘治乙卯年（一五五五年）の夏越方の出会いと承るなり。そもその因縁は尾州郡村の生駒屋敷雲球（家長）宅に候。峰須賀小六殿（正勝）、彼の者、雲球屋敷にて見知り、色々不審の儀もこれあるにより、乱波の類にては候わずや、その風鉢は無頼の輩の如く、小兵なれども武芸あり、なりに似合す兵法の嗜みも深く、初めは得体知り難し。去る程に仕切りに懇願して峰須賀の村好み候なり。やむなく小六殿、宮後屋敷へ伴い出入袴の御用に足し候ところ、才智を働か、機転人に勝れ、胆力殊に英で、遂には小六殿閉口すれども、彼の者、村多凡人を超え、日を追って調法を感しなされ候由に候なり。彼の者、信長公に奉公の瀬鱧は、郡村生駒雲球屋敷の久庵様（信長室）御口添えあるによる所多あり。小六殿の使い走りに郡村生駒屋敷へ往来。久庵様の御前少しも憚らず長談義もしばしば、生来の利口者なれば、久庵様の御機嫌取る事たくみなり。当時久庵様は、信長公御手付きとなる事、よくよく承知仕りての所行、あきれ果てたる御仁に候。よくよく一回、藤吉郎の厚顔恐れ入りたる仕業に候。

⑤藤吉郎生国は、尾州下の郡中々村在、親代々百姓をもって生業仕る村長役人の家なり。同郡内の松葉の城、織田右衛門尉様、御支配の百姓なり。天文この方、度重なる兵乱あり。兵馬のために田島薙ぎ倒し狼藉の限りを尽し、結句百姓逃散、失家多く御座候なり。殊に下郡において生便敷、松葉の城主右衛門尉、牢人の輩を多く召し抱え、武備に怠り無し。為に軍用重り不如意に落ち入り、反銭・夫銭は旧に増して敵しく相成り、したがって万一、反銭等夫役に至るまで懈怠これあり候わば、罪科に処し、為に百姓身代を遣す者多あり。中々村の藤吉郎在所は、仲々の大村に候ところ、失家二十有余戸、貧村と相成り、藤吉郎の家、代々与頭を相勤むるも、備後様（織田信秀）御在世の初、御軍役を相勤むるも、天文の威相果て、後添えの義父と折合わず、口減しのため、寺奉公に追い出され、寺住い候ところ、近在の悪童ともと交り多く、経文読も空事、寺奉公両三年を経ずして離縁と相成る。一端は生家へ罷り帰り候。されども、百姓も続かぬ間、御袋様の御意見も馬耳東風、蕘悪なる聞え村中に高く、一族親類の者寄り寄り相談、よくよく藤吉の所存を聞き糺し、行方を案し思案の揚句、御寺の沙弥を呼び、僧侶にて身を立つ様に言い聞かせ候も、首を左右いたし、「しからは汝の本意申せよ」と沙弥申しければ、「百姓の業は春に種をおろし秋これを蔵す、これ自然の恵みなり。されども、近頃は兵馬乱入して田島を薙ぎ倒し棄・黍も稔らず、自然に百姓のなりわいも立たざるなり。我、百姓を好まぬの所以なり。時節に候、武者奉公望む所、これより、諸国修業に罷り立つ所存」と云い張り、御袋様・沙弥の意見にも耳を借さず、中村の家を走り出で、駿・遠・三に流牟、袖乞うも厭わず、牢人の果て、遠州敷知郡浜松在、暫時兵法者の家に奉公、尾州上の郡へ罷り来たり候。彼の藤吉、中村の在所を走り出でるは十三歳の事。

◎峰須賀小六殿、尋ね聞く事、聊かも飾り立てず、素性等も実鉢申し語り候。なお隣国の事情によくよく通じ、尾州は元より、三州の事も遠州の事も、美濃内何々某は富裕に候、某は差し迫りたる内輪内の事、小賢しく申し聞かせ候。兎角この者、才智だけたる小体、退屈に事欠かざれば、左右いう者として相無き間、峰須賀屋敷に居留り候由。後日、清須織田上総介様（信長）、郡村生駒屋敷に罷り候の時、久庵様の御口添えもこれあり、清須へ召し連れなされ候。栴檀は一葉よりかんばし、良禽は枝を選ばとこや、この人、後に立身なされ、羽柴筑前守、大関殿下の事。——木下藤吉郎因縁の事（南窓庵記写す）（『武功夜話』巻三）

## 2

木下藤吉郎秀吉が武士として登用されるまでのエピソードを述べた一連の文章を、右にそのまま示したのです

が、いままでもなく、そのうちの⑩文が、前述の『大閤記』と深くかかわっています。『大閤記』に記されている藤吉郎出生の神秘は、『武功夜話』の場合、まったくありません。藤吉郎出生時の家庭環境が、なまなましく物語られています。戦乱による農村の荒廃、義父との折合いの悪さ、実母の忠告に耳をかたむけぬ悪運ぶり、武者の華々しさを夢みる十三歳の少年、その出奔に等しい家出が、リアルに叙述されています。⑩文のエピソードは、⑨文によると、藤吉郎自身が峰須賀小六に物語ったもののようです。

三河から駿河・遠江、美濃あたりを放浪して、心身ともにたくましく成長した藤吉郎は、自宅へは寄りつかず、同じ尾張国でも小折——今の愛知県江南市小折の豪族生駒家長の屋敷へ身を寄せた。たぶん、教える年二十歳ころのことです。生駒家は『代々富家』（巻一）で城構えの広大な家屋敷に住み、『兵法者・年人』を数多く召しかかえていた。そのころ、やはり生駒家へ出入りしていた峰須賀小六に奉公を依頼したので、小六が承知して峰須賀の使用人になったのです。峰須賀小六は前野村のすぐ隣、江南市宮後に住んでいて『武功夜話』から察するに、馬借——すなわち馬を使って運送に従事した労働者集団の頭領をしていたのではないかと思います。一方、生駒家は油を商っていた様子です。だから、両者のあいだには頻繁な往来があつて、藤吉郎は、その間を行き来して、連絡の用を果たしていた。

そのうち、生駒家の当主家長の妹《久庵（吉野女）》が、信長の《御手付き》であることを知ると、抜けめのない藤吉郎は、あつかましく彼女に自分を売り込んだ。むしろ、信長に召し抱えられたいからです。『武功夜話』の別の箇所では、この間の事情を次のように説明しています。《久庵様、郡村生駒屋敷に在せし頃、近くに侍り、久庵様機嫌損ねぬこと妙なり。口巧者なれば、御前を憚らず、人の口に致し兼ねたる色話等、少しも恥と思わず、ぬけぬけ語り申し候。兎子に候なり。ある時、信長様、久庵様屋敷に越しなされ候の時、彼の者（藤吉郎）御前に召し寄せられ、徒然に話相手になされ候事あり。藤吉（郎）儀、信長公の御前を憚らず、日頃の馴れ話の仕草に、信長公、御機嫌斜めならず候なり。小兵に似合わず、御前へ武者奉公を直願候由に候なり。その場居合せ候八右衛門尉（生駒家長）なまりかね、汝の如き小兵、臂力無く、太刀振りも覚束なき者、心得違ひ甚しきなり。重々申し諭し御意見候も、「御大将の馬の口取りなりとも御用下され」と久庵様へ憑み入り候ところ、久庵様の御氣付きの者、信長公へ口添えなされ候。郡への使い走り如才無く相仕り、遂に清須御城へ奉公候初めに候なり》（巻二）。藤吉郎秀吉の意図は見事に成功したのです。峰須賀小六は藤吉郎より一〇歳年長、信長は藤吉郎より二歳年長だっただと思えます。

前に引用した『大閤記』には、信長に対する奉公の端緒は述べてありませんが、『大閤記』の別の箇所でも、それを次のように記しています。《其比、信長公は清州に御在城ありけるに、永禄元年（一五五八年）九月朔日に、直訴せられけるは、某父は、織田大和守殿に事へ、筑阿弥入道と申候て、愛智郡中村之任人にて御座候。代々武家之姓氏をけがすと云共、父が代に至て家貧しければ、某微小にして、方々使令之身と成て、君門に達すること能はず。唯願くは、御蔭を仰ぎ存じ奉る旨申上しかば、信長公、彼が威儀立辨を御覽して、打笑せ給ひつゝ仰けるは、「輔車は猿にも似たり。心も軽く見えしが、気もよく侍らん」とて召し出されけり。》（巻第一）

『大閤記』の、この枠を着けたような文体の秀吉像は、謹厳な人物になっていますが、硬直していて、秀吉の素顔がみられない形象です。文章が「なり」「けり」という叙述体になっていて、文体が荘重体ですが、人間の抽出に迫力がないのです。『武功夜話』の文体は、いわゆる〈候文〉で、今日でいえば、「です」「ます」調の文章で、藤吉郎秀吉の人間像が躍動しています。小兵で、見かけは貧相な藤吉郎が、ロ八丁手八丁に活躍して、ユーモアの効果を巧みに使いながら、武家奉公という目的を達してゆくさまが、生動しています。しかも信長が〈将来の大器〉たることを、ある程度見越していたかもしれません。

『武功夜話』の、当初に引用した文章に、『南窓庵記写す』とある『南窓庵記』は、先代の前野家の当主が、書き記しておいたものでしょう。前野家の当主も、生駒家や峰須賀と親交がありましたから、前野家の当主は、家長や小六から聞いた木下藤吉郎秀吉の若き日の姿を、実際に見ていた藤吉郎と重ねあわせて、子や孫に伝えるために、語り口調で書いておいたものを、『武功夜話』の著者前野雄善が、『武功夜話』の叙述に当たって『南窓庵記』から、そのまま抜き書きして、自作中に入れた、というわけです。若き日の藤吉郎を見ていた前野家の当主というのは、第十四代雄吉、書き留めたのは、第十五代当主雄善だと思います。雄善が長ずるに及んで雄吉が雄善に話し、雄善が書き留めておいたのでしょうか。雄善は峰須賀小六と同年です。その語り口調の文体は、木下藤吉郎の若き日の姿を彷彿とさせる描写たりえています。

## 3

『信長公記』における〈信長の描き方〉はどうでしょうか。『信長記』に比して『信長公記』の表現は簡潔ですが、しかしこの場合も、信長はしばしば英雄として賞賛されています。一例をいわゆる桶狭間の戦いにとつて示すと、次のようです。周知のように信長は、合戦の前夜、すでに今川義元軍が沓掛（愛知県豊田市）に入ったという情報に接しても、家来たちと策戦会議をせず、世間話をしていて、『既に深更に及ぶの間帰宅候へ』と言って帰してしまふ。防衛前線の丸根・鷲津から救援を求めてきても、ほったらかしです。家老たちが『運の末には知恵の鏡も曇るとは此節なり』と言って嘲弄する始末です。予測されたとおり、夜明けがた、丸根・鷲津から今川軍が攻撃をかけて来た、という注進があつた。『此時、信長、敦盛の舞を遊ばし候。人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか、と候て、螺ふけ、具足よこせよと仰せられ、御物負めされ、たちながら御食をまいり、御甲をぬし候て御出陣なさる。』（首巻）大胆不敵かつ颯爽たる出陣ぶりです。

こうして清洲から熱田、丹下・善照寺・中島を經由して、桶狭間へ奇襲攻撃をかけ、見事に義元の首をとり、その日のうちに清洲へ帰った、というのです。味方がたった二千で今川軍の四万五千に勝ったという神速果敢な信長の活躍ぶりがたたえられています。勇敢ゆえに神の庇護も得られ、好運を招来した、という書き方で、それに反して義元には非道があつて、敗死はその因果だという説明があります。

ところが『武功夜話』巻二を見ると、右に述べた信長の行動の背後には、彼の緻密な策戦計画と工作があつて、その一点にすべてを賭けていたことが詳細に理解できます。その一端を次に示すと、桶狭間の戦いは一五六〇年五月ですが、早くも一五五八年九月、信長は、そのころ『野』にあつた峰須賀小六に、『国中郡内』の関を夜中深更に及んでも『人馬荷駄運技』お構いなし、の『御墨付』を与えています。別に、二人が親しかつたわけではないので、周囲も不思議がたくらいです。その小六は、今川方の動向を細かにさぐっています。一方、今川方の『細作』も尾張へ入り込んでいる気配です。いよいよ合戦の年三月、信長は久庵屋敷で『おどり張行』、その期に、予め連絡してあつた峰須賀小六に逢っています。信長の対応は不愛想ですが、これは小六の忠誠度確認と周囲の眼を顧慮したためのように思われます。

ところで、二人の応接の場面描写は見事です。今川軍の尾張侵入が間近であることを知悉している小六は、危急を信長に訴えます。そして〈自分も二千くらい人間を糾合できるから、防衛軍の配備を急ぐべきです〉と云つて、『寸時を惜しむ刻に候。御用命あつてしかるべきと切々懇願候次第』です。それに対する信長の応答は明快です。

《駿・遠・三の惣勢三万有余、我が手の者五千ばかり。この人教をもって相分け、国境に布陣、野陣に駆け廻し、百に一つの勝算ある哉。案の外なり。汝等野にある者に似合わず、その言を聞く耳なし。大軍を迎え、五、三日相支え候とも加勢なお甲斐なき事。清須までは半日、山なく大河無く、無手の籠城は一層不甲斐なし。この期に望み、何の行の因、所詮は勞あつて益なし」と向々大笑なされ候。》(巻二)

こんな詳細が『武功夜話』の著者前野雄輩に分かるのは、この日、前野氏の一族前野長康・義康が、蜂須賀小六に同行しているばかりでなく、長康は小六の一味になっているからです。時に信長二十七歳、小六三十五歳、長康三十三歳、前野家の当主雄吉は三十五歳です。『武功夜話』の著者が生まれていないのは勿論、彼の父雄善がたった九歳の昔のできことです。前野家の人がとが記録・聞書を大切にしていたと同時に、著者はまた、史実をさぐろうとして、すごく熱心です。

結局、その日、信長が小六に依頼したのは、今川軍中における義元の動静をさぐることです。《如何に治部少輔(義元)鉄鎖の構えといえども、勝に乘ずれば油断あり。…若治部少輔くつろぎの期これあり候わば、天与の機なり。梁田弥次右衛門、同鬼九郎(信長直属の細作)とよく示し合せ、共に相計りて逐一注進候え。総じて敵と立ち向うの時、見切り肝要なり。家中大人共、意見凶々、徒らに取り乱し一陣と成り難し、さりながら、我すでに太刀抜き放ち治部少輔と立ち向うなり。太刀の下は地獄よ、生死は一定の定め事。この期に及び迷い相無し。…汝等野にある者、心尽して相働け。》

いよいよ合戦が迫ったとき、今川の進軍に対する織田方の細作は万全です。蜂須賀小六が、信長の期待どおり行動したのです。彼は前野長康を始め《究竟なる細作・飛人等五十有余の人教》を伴って、今川軍に大胆に接近しています。今川軍の進攻を祝して出向える百姓たちになまじって小六たちも《百姓になりすまし、海道へ罷り出で今川治部少輔の御興》の動きをとらえます。小六は地形を考えて、その進行路まで予測し、《献上の品々》を用意して、そちらへ誘導した形跡さえあります。そして、信長への連絡よろしく、信長の策戦は、びつたり決まったのです。

この日、前野家の当主雄吉(著者の祖父)は、龍泉寺城(名古屋市守山区)をかためていて、合戦の現場へ急行したのに間に合わず、無念の思いをします。《折しも大師懸辺り関の声天地に轟き渡り、四辺真音と相成り、雷をともし、天地鳴動してやまず、その場に立ちすくみ呆然たれば、彼方狭間より勝関天地に鳴り渡り、かれこれ敵、味方なる哉定めがたし。佐々蔵助(この日の龍泉寺勢の指揮官)運参の落度、顔面引きつり一同に下知。その場に馬乗り捨て駆け下り、三町ばかりの間、幔幕泥土にまみれ、人馬斃れて惨憺たる有様、駿河勢さながら潮のひきたる如く無人なり。佐々蔵助始め柏井衆、田楽狭間への道のり近くにあつて斯の如き不覚、しどもどろの為体。上総介様(信長)御覧じなされ、目もくれず治部少輔(義元)の首級を鐵頭に竿頭、清須へ御引き揚げに相成り、一党の者、遣方無きおもいにうち萎れ、夕陽に龍泉寺へ引き取り候》というわけで、合戦現場の激闘場面はありません。『武功夜話』は、それくらい体験者の記録や体験談を尊重して書かれています。著者は、エピソードを書く場合、いたるところで、その出所を明示しています。

## 4

『信長公記』の著者太田牛一は信長の同時代者ですが、その本文中に私的体験を書くことを極力避けています。《太田又介》という名で、作品全体を通じて三箇所登場しますが、二箇所は名前を羅列する中の一人、あとの一箇所だけ堂洞城(岐阜県加茂郡富加町)攻撃における活躍を書いています。《二の丸の入口おもてに高き家の上に

て、太田又助只一人あがり、黙矢もなく射付け候を、信長御覽し、きざじに見事を仕候し、三度迄御使に預り、御感有て、御知行重ねて下され候キ》(首巻)というのですが、自分の手柄話なのに、まったく著者としての主体を隠した文章です。

峰須賀小六正勝と前野小右衛門長康とは、木下藤吉郎秀吉の盟友として、『武功夜話』中では大活躍しています。『武功夜話』は単一なストーリーの物語ではありませんから、秀吉を含めた三人を主人公とは言えないのですが、絶えまなく登場する主要人物たちです。秀吉が『天下人』たりえた草創期の参謀である小六であり、長康であって、秀吉が英雄たりえた重臣です。ところが太田牛一の『信長公記』には、峰須賀小六が全三回、前野長康が全一回登場するだけです。この二人に限らず、『信長公記』の著者は、信長を主人公にすえ、年代順に、その事件を簡潔に叙述してゆきますから、信長以外の人物は、その境涯に対して、責任をもった扱いをしない結果になるのです。事件の参加者として点在するだけです。

『武功夜話』における峰須賀小六および前野長康の登場のしかたは、次のようです。

《尾州年人の者、海東郡峰須賀邑の者、峰須賀小六故あつて峰須賀邑を退去、尾(尾張)の丹羽郡稲木庄宮後郷の安井弥(兵衛)の家に寓居、豪勇遠州に聞え高き俵者なり。小六殿輩下の無頼の者、その教一千有余人、まさに士族の魁首なり。小六殿舎弟分、前野小右衛門(長康)、この人某(雄龜)どもの大伯父なり。祖父孫九郎尉(雄吉)の舎弟に候なり。この人無頼候いて、縁者小六殿と親交あり、義を結び舎弟と成る。河内美濃に遊び、遂に信長公の御勸氣を蒙り勸当され年人となるところ、後年、木下藤吉郎殿旗下に参するなり。》(巻一)

そのあと、秀吉登場紹介の場合と同様に、二人の後年の境涯とその嫡子のことを略述します。《峰須賀小六正勝、後年、彦右衛門と成る人。嫡子小六という、家政公の事。阿州二十三万石を御領地、家政公、蓬庵様という。宮後村安井屋敷にて御誕生遊ばされ御成人、……寛永(一六二四―一六四三)の今の世、いよいよ御家運弥栄え候は、まこと御目出度き次第に候なり。》(前野小右衛門尉(長康)、小六殿と共に、羽柴秀吉旗下に参し、秀吉公創業の無二の功臣なり。但州一国の地頭職を仰せ付けられ、但馬守と成る人なり。されども、御嫡子出雲守様(前野景定)、関白秀次公の不祥事に連座の科あるに依つて、不運にも御家御改易と相成るなり。……)といった調子で、ほぼ年代順に、歴史事件を辿りながらも、ときどき時間が飛躍して、後年の現状に及ぶのです。つまり現在の人間存在が、単に現在の時点にたつ一個のそれではなくて、重い史的過程を背負っていることを思い知らされる書き方です。『信長公記』の直列連結型年代記と違って、こういう記述方法が、重厚な文芸的迫力をもつ所以の一つです。

膨大な分量で、かつ多様な内容をもつ『武功夜話』の中で、右の三人の生涯を意図的に抜粋して辿ると、近代小説に通じる(三人三様の成長変転)を見ることが出来ます。前野家十三代当主宗康の時代は戦乱にわけられて、前野の村はかなり疲弊していた様子です。宗康の子が、雄吉・長康・勝長ですが、三人とも前野の村を離れています。少壮の長康について『武功夜話』に、こんな記事があります。《御舎弟様(長康)は、上総介様(信長)に御勸氣を蒙り、扶持離れいたし河内(松倉)に罷りあり候。諸所に遊行、身持ち定まらず、宮後村の峰須賀党に加わり、風来の様体たれば、祖母妙善(宗康妻)ご痛心の次第、意見も心に介さず候由申し聞き候。心を痛めたのは長康の母だけでなく、長康の兄雄吉も同様です。雄吉は織田信長の御台地代官をつとめるようになりますが、織田家に内部分裂が起きたとき、弟長康が反信長の動きをしないか、心配しなければなりません。

《将右衛門尉(長康)身持ち未だ定まらず、峰須賀小六殿と義盟を結び、主取り好まず諸々遊俠の悪名あり。

…：騒乱に乗じ一揆に糾合して擾乱に及び候哉、面目無し」というわけで、一門の者を長康のところへやって、その本心を尋ねさせています。長康の答はこうです。《兄者人（雄吉）に伝えられよ、左右相憂のほど無用に候なり。我等野にありて主取り好まず、義を守り俠道尊ぶは法度ははつとに候なり。我等手の者、三郷内に一千有余は下る間敷候。これらの備え急ぎ出来候わば、二十有餘ヶ所一斉に烟を揚げて御台地警護仕る所存に候。》長康の解答は、もし万一のときは、手下をつかって兄貴が代官を勤める御台地を守ってやろうというのです。

蜂須賀小六・前野長康の二人が、信長のために桶狭間合戦で活躍したのは、前述のとおりですが、その後、信長から遠ざかりろろとしています。一五六三年、信長が小牧山城を築いて、清洲からそこへ移ったとき、いろいろの人々がお祝いに参上するのにも、この二人は、それを拒んでいます。その根拠地は、現今の名称でいうと、岐阜県川島市を中心とした木曾川流域です。当時は、天険の要害だったのです。《尾張・美濃の境目に大河あり。国境は節所たれば、中洲の大いなる処へ居を構え、鏡つて群集むらみい、尾張の形勢を差見候いて、出入り巧者振りなり。その数、数千人…：為に領主、地頭たりとも難渋、或いは美濃へ加担…：将また尾張方へ出入りに参じ彼方此方へ走り、進退まこと定め難く、縦横かきぎの様風迅の如し。蜂須賀小六殿、川並乘の棟梁に御座候。この人、生来の才略に勝れたる御仁に候なり。天文の頃、南蛮伝来の種ヶ島なる飛道具の名手たれば、…：脇より離さず、威風川筋七流の勇士魁かえり合して義盟をなす。これすなわち蜂須賀忠ちか》（巻二）というわけで、己の旗印をひるがえて神出鬼没の活動をするのです。《義を結び、血縁を約す》（巻二）徒党で、いわば日本の梁山泊です。前野長康ももちろんその一味です。

《主取り好まぬ》蜂須賀忠が、なぜ木下藤吉郎秀吉に帰したかという点、彼ら二人が、秀吉の人柄に《心服》したからです。生駒家へ迎りついたとき、素浪人にすぎなかつた秀吉は、信長の家来になつて以来、その才能が実を結んで、着々と立身しています。しかし秀吉の蜂須賀小六・前野長康に対する態度は、きわめて丁寧です。《足輕鉄砲隊百人組頭》に任せられたとき、彼は蜂須賀忠の拠点松倉へ行つて、ひたすら助力を懇請しています。《貴辺等このまま野にあつて無為に朽ち果てるは、口惜しく》と言つて、自分と一緒に信長の将来に賭けることを勧めるのです。しかし《蜂須賀小六殿、前野将右衛門尉（長康）決面》をつくつて、なかなか耳を貸しません。

それでも結局《蜂須賀小六殿黙然、しばらくあつて口を開いて申されけるは、《織田上総殿（信長）遊道に並ぶ者無き勇將に候も、今日まで御一門誅滅させられし事、その数を知らぬなり。その御気性雷電と承るなり。某ども生来の野人、口舌の才智相無し。引き替へ貴辺能弁の才あり。我等長刀長柄一騎駆けの業これあるといえども、所詮、辺土に骸骨をさらす事紛れなし。川筋党中の者、尋常の作法の心得弁えずも、言葉をとともに致し、己を知る者のためには粉骨の労惜しまずの覚悟御座候。幸にして貴殿、年来の機縁あり、上総殿幕下、究竟くわいけいなる御家人群集するといえども、この先、才智をもつて、万事において緩慢穩当に存命しうるは、貴殿をおいて他に相無し、百人の頭は千人万人の長なり。我等、貴殿のために犬馬の労を惜しまんや》（巻二）ということになります。

前野長康が、信長に服属しないことを、その後も、兄雄吉は心配しています。《明鑑あきかた衆何れも立身なり》、しかも前野は…：というわけで、《再三意見

当初、木下藤吉郎ら三人の盟友がする《戦争のやり方》は、信長と違つていたように思われます。敵を弾引に

殲滅するのではなく、誠実な《調略》をもって、なるべく無血で敵を降服させたり、それが駄目ならゲリラ戦で向かう戦略を尊重する傾向があるのです。味方の人的消費を避けるばかりでなく、できることなら、昨日までの敵を、今日は味方の軍勢にくり入れる戦略を考えていたように思うのです。人間は一般に、自分で新しい集団を組織したり自立して生きるよりも、既成の組織に入って、その組織に帰属したうえで、その中で自己顕彰することを生きがいにする傾向をもっています。変革期においても、それは変わらないので、《調略》の戦略が成功する理由です。『武功夜話』は、それをえがきえています。一五六四年の《字留間（鵜沼）城攻め（巻一）》は《調略》の典型です。これは秀吉が、反対する信長を強引に納得させた《調略》です。同年の《稲葉山（城）焼打ち（巻二）》は、ゲリラ戦の典型で、秀吉と蜂須賀小六と前野長康の、息の合ったゲリラ戦です。しかも、それが次々に成功するので、信長は秀吉を重んじるようになる。秀吉は蜂須賀党の合力によって、ついに墨俣一夜城の構築という難問まで、やってのけることができるのです。

皇室や足利將軍は、強そらな戦国大名を頼んで、旧来の秩序を回復しようとする。信長は大軍を動かし、その行動範囲は拡大してゆきます。それにともなって、秀吉は信長麾下の将の一人として、いやおうなく信長の戦略も身につけていかなければならない。近江へ進出したとき、秀吉はあるきっかけから、かつて美濃で勇名をはせた竹中半兵衛重治という人物の存在を知ります。

《竹中半兵衛重治は元岩手（岐阜県不破郡垂井町）の城主なり。信長公の御勳氣を避け、家督の事、舎弟の久作に相譲り、坂田郡長享軒（滋賀県坂田郡近江町）の堀次郎が城へ隠世候。彼の半兵衛儀、軍略に長け、己の才略に任せ、稲葉御城に隣あるを憂い、小人数をもって乗取り、耳目を驚かす事あり。信長公、彼の者の才略を賞し給い、稲葉伊予守（良通）を遣わされ、秘かに「稲葉の城を我が方へ進上候え」と申し越され候ところ、彼の者申しけるに、「某は我欲心にあらず、某如き小人数をもって手易く取り抱え候如くにては、先々到底稲葉の城保ち難く候。俾りながら某案するに、要害如何様に堅固なれども、人心一和ならざるは、要害堅城も物の用にも立つべからざるなりと御殿（齋藤竜興）へ御諫言の上、御返上の心算に候。たとえ織田殿の御願にあろうとも、某は果代の齋藤の家人に候。主家に謀反の心いささかも相無し」と御断り申し候事御座候。これをもって信長公より勳氣蒙るの所以に候。竹中半兵衛重治、まことゆゆしき武者に候。木下藤吉郎、右の子細、稲葉伊予守より承り、心に深く極めなされ、是非半兵衛を所望すること切なり。》（巻四）

秀吉が、この優れた軍略家たる竹中半兵衛を、ぜひ自分の傘下に招聘しようと考えたとき、彼は半兵衛に逢う前に、蜂須賀小六・前野長康、自分の弟の羽柴秀長と慎重にうちあわせをしています。そして万全の策をたてて訪問するのです。この日、同行した前野長康は対面の様子、感慨を感動的に書きとめています。それを『武功夜話』の著者が、作中に引用しています。竹中半兵衛は長身豊體、《切長の目》をして容姿端正、《面貌長閑なる事春海の如く》という人物でした。しかし、用件は急にきりだせない雰囲気、気がついてみると、《半兵衛が泰然自若の構え、恰も合戦、敵に備うるの趣》があつて、《斯の如き堅陣を破るは吳孫（皇子・孫子）といえども難きなり》というありさまでした。《御大将木下藤吉郎、日頃の巧舌を閉し、只管軍師竹中半兵衛を招待に心を遣ひなされ候》と記しています。結局、秀吉は自分が《元来一様の者》なのに、前野長康、舎弟秀長らと盟友の契りを結んで信長麾下にあるのは、《欲心をもって栄華富貴を願う》のでなく、《偏に平天下、百姓士民を塗炭の苦しみより救い、畏れ多くも主上を安んじるが本意》だと、《実心をもって》説得し、半兵衛を承知させたのでした。

《實意相解り申した、それが世間を捨てただ一人運観を粧う、これ畢竟卑怯の如くに候。御詞の如く、天下

の騒乱、何ぞ余所に見んや」というのが、半兵衛の弁です。説得する秀吉も承諾する半兵衛も、この程度の理論しか持っていなかったのは驚きですが、抽象思考の性癖をもたない日本人の伝統は、いつの時代にも、その本質を露呈します。諸子百家が輩出した中国戦国時代（BC四〇三〜BC二二一）と違って、日本の戦国時代は、哲学者が全然登場しないのです。竹中半兵衛に承諾を得て、『藤吉郎始め三人の者、闇夜に月を見たるが如く、迷妄の雲ひらけたるなり』と、前野長康は感懐を述べています。秀吉、峰須賀小六、前野長康、それに羽柴秀長を加えた四人の間とは違った、正統派の軍師を盟友に得て、彼らは、よほど嬉しかったのでしょうか。一五七〇年のことです。

そして、すぐそのあと、浅井・朝倉軍と姉川で戦ったとき、竹中半兵衛は、見事な策戦を献言して成功しています。秀吉は『某<sup>たが</sup>斯の如き大軍の対陣野戦の出入りは、かつて相無く候』と言って、過去の体験を正直に白状し、峰須賀小六・前野長康は『半兵衛、我等に御かまいあるべからず。手前ども、殿に随い五歳、夜討ち朝駆け俄懸合いに武辺の業鏡い、今日一命ながらえ候。今度の取り合い、一河を挟み、数方の大軍、野戦の出入り、このままに過ぎ候哉、乱軍の間衝なく駆け廻るのみ、何卒御意見候之』と言って、これまた正直に献言を依頼しています。半兵衛に新参としての遠慮があつて、すぐ口を開かなかつたからです。

こうして木下藤吉郎秀吉は、信長麾下にあつて大活躍をし、遂に天下人にのしあがるのですが、その初期における秀吉の〈盟友の扱い〉は、以上に述べたように丁寧です。天下人にのしあがつてゆく過程の、秀吉、峰須賀小六・前野長康・竹中半兵衛・羽柴秀長の、それぞれの活躍と辛苦は、『武功夜話』に詳細に描かれています。『信長公記』や『信長記』『太閤記』は、『武功夜話』より視野を広くとつて、信長・秀吉の生涯を大局的に扱うのですが、それぞれに、人間であるよりも〈大時代の英雄〉です。『太閤記』（巻第十八）には竹中半兵衛の列伝もありますが、やはり超人すぎます。『武功夜話』の場合は、華々しい英雄であるよりも、まず〈生きた人間たち〉です。だから、秀吉や参謀たちの動静や辛苦が、重いリアリティーをもって迫る力をもっています。

## 6

峰須賀小六、前野長康、竹中半兵衛、羽柴秀長ら四人の参謀に対する秀吉の応対は、秀吉の地位・権力の上昇に伴つて変化してゆきます。晩年に向けて、秀吉の、直接の描写は減つてゆくにもかかわらず、彼の内面にいたるまで想像できるほどです。四人の参謀たちも、秀吉の地位上昇、社会の変化を鋭敏に感得して、それぞれ死んでゆく順序に、その遺言もまた変化しています。

四人のうち、最初に死んだのは、竹中半兵衛です。享年三十六歳。一五七九年のことで、秀吉はまだ信長麾下の二武將として、播磨あたりで奮闘の最中でした。半兵衛は死の直前まで、秀吉と仲間武將たちの関係を心配しています。ひときわ優れた働きをしていた秀吉も、失敗をしてかして信長の不興をかつたり、信長麾下の武將たちの嫉妬にあつたりして、その存在がゆらいでいたのです。半兵衛は、それに対して、誰よりも卓越した方策をもって、信長と秀吉の間を調整していました。秀吉の打撃は、相当深刻だったはずですが。前野長康は丹波にて、半兵衛の病死を暫く知らず、播磨にいる秀吉の陣中へ帰つてから、それを知つて、峰須賀小六、羽柴秀長とともに悲嘆にくれています。半兵衛は『覇を為す者は、己を凌ぐ者は心好しと為さず』という言葉を残していました。長康は、それを見て、自分の記録『五宗記』の中に、『遺筆なお生あつてその言うところ凜然として秋霜の如し』（巻八）と記しています。秀吉にとって幸いだつたのは、竹中半兵衛の死後三年たつて、信長が明智光秀の反逆に遭い、自害して果てたことです。

次に亡くなつたのは峰須賀小六、すなわち彦右衛門尉正勝です。享年六十一歳、一五八六年五月のことです。

今や関白豊臣秀吉の天下平定は、だいぶ進んでいました。小六病臥の報に接した前野長康はその年三月、彼を大坂屋敷に見舞っています。長康は京都にあって、政務多忙の日々でした。小六は長康に向かって《我、今日あるは筑前公（秀吉）の御蔭なり》と言い、子息家政の後事を依頼しています。家政は、父のおかげもあって、阿波国十七万石を拝領していたのです。《われわれは戦争は得意だが、《兎角平治の事には愚頓なれば、今や殿下（秀吉）の御前には有識の才人も数多くこれあり、心して聊かも油断なき様御意見下されたし》、というのです。多忙の長康に代って側近の清助が見舞ったときには、長康へ次のような伝言を頼んでいます。《平癒候上は上京して種々申し度き儀もあり。天下の儀相定り平治の御奉公は大敵に向より難し、御身御大切になされよ》（巻十六）。そして《狡兎死して走狗烹らる》という中国の諺もある、《心致すべき事なり》とも言っています。秀吉の地位、権力上昇に伴って、幕下における草創の臣の存在に異変がおきつつあることを、小六は予感しています。『武功夜話』の著者雄翟は、清助の生前この小六伝言の話を聞いて、作中に《蜂須賀彦右衛門殿の風韻、真に迫り来て耳根を去らす》と書き、《高鳥尽きて良弓蔵れ、敵国やぶれ謀臣亡ぶ》と書き加えました。めつたに故事を引用しない雄翟の、この『史記』（准陰侯伝）引用は、後段の長康の無残な死と見事に照応しています。

秀吉の天下征覇が進行するにつれ、あとに残った前野長康・羽柴秀長と秀吉の距離が遠くなってゆきます。一五九〇年は、秀吉の小田原攻めの年ですが、このころから『武功夜話』に、前野長康の秀吉批判が登場しはじめます。

《（小田原）御出陣に先立ち若君（鶴松）の御生誕あり。これは妾淀君、御生母なり。御世つき御誕生は関白殿下（秀吉）喜悅一方ならず、随つて、淀殿の御手柄もまた格別、関白殿下、益々母子ともに御深爱なされ、淀殿、天性の器量<sup>きりょう</sup>胸容を増し、その縁に連なる者いよいよ御登用なされ候。五十路を越えて和子の御生誕は、武者遣万丈、雄剣を腰に帯し、櫛風万馬、教度の修羅場を往來の勇将も、我子いつくしむ心も、煩惱のため明鏡も曇りたる如くに候。数万両の黄金を賦り、古參新參、譜代衆、外様衆を問わず、質子を差し出すべく仰せ付けられ、なおあきたらず、忠節の明し、誓紙差し出しも仰せ出でられ候。一、近頃、関白殿下のなされ様、表裏あるが如くに候。……》（巻十六）

信長の子信雄の改易、朝鮮侵略計画をはじめ、前野長康は、秀吉のためにいろいろ心労するのですが、絶大な権力を握った秀吉に、彼の憂慮は届かなくなっています。別に隠居したわけではなく、相変らず重臣として東奔西走、文治の政策にも手腕をふるっているにもかかわらず、です。彼はそのころ、細川幽斎・千利休と親交を結んでいます。あいにく、羽柴秀長は病んでいて《余命幾はくも無し》（巻十六）の状態です。

長康は小田原から帰京すると、千利休に会談を求められています。利休が言うには、自分は羽柴秀長公から高麗渡海の件をはじめ、いろいろ秀吉に諫言するように求められているが、貴殿の政情に関する意見はどうか、というのです。長康の見解は『武功夜話』に詳細に述べられていますが、特に高麗侵略は、国内疲弊の現状から反対なのです。しかし大勢はとどめ難い、自分は知行地但馬で隠居したいが、秀吉から高麗進攻のさいには《肥前名護屋の在番は汝をおいて他に相無し……今しばらくの辛ばり頼み申す》と言われている、と言っています。

死期の迫った羽柴（豊臣）秀長について『武功夜話』に次のように記しています。

《御舎弟美濃守様（秀長）尾張以来、関白殿下（秀吉）いまだ藤吉郎と申され、所所の合戦に立ち向い、たてし武威<sup>ぶいき</sup>勝<sup>かち</sup>数<sup>かず</sup>らべからざるなり。弟道を尽され兄弟の序を貫き、まこと真義の道厚き御仁に候。胆略あり事に動ぜず、

数々の武功あるといえども、驕らず大氣の人なり。筑前様（秀吉）を<sup>侍</sup>任せ、生涯千軍の間を往来、具足を解く事相無きなり。生来篤実の性は、諸将その徳を慕い、衆皆悦服す。……」（巻十七）

一五九〇年の暮、前野長康は羽柴秀長を、大和郡山に見舞っています。秀長は、最近の秀吉の施政について、長康から近況を聞きただしつづ、多方面にわたって切々と批判しています。長康は《すでに声枯れて肉落ち憔悴の人と為るに接し……思わず眼をそらし》ます。秀長が直接秀吉に諫言できない無念を語れば、長康は《若君御生誕以来、それがしども古参の者の意見も軽んじられ、……迎合の昵近來の意見を重要なされ……愚見も出来申さず候》（巻十七）と云って歎いています。

一五九一年が明けて間もなく羽柴秀長は死に、それから間もなく、千利休が《死罪を仰せ付けられ》（巻十七）切腹しています。《一人但馬守様（長康）、年来の心約の人を失い落胆限り無く候。清助話》と『武功夜話』は記しています。

## 7

盟友たちを喪ったあとも、前野長康の人生は平坦ではありません。人生に偶然はつきものですが、必然の展開の中に悲運が伏在していたのです。まず子息景定が細川忠興の娘（幽斎の孫）と結婚して、さて秀吉の所へ挨拶に行つたところ、景定はいたく秀吉の気に入ります。そのころ秀吉の子鶴松が早世します。また、秀吉は朝鮮侵略を強行します。新しく親戚になった細川幽斎が、前野長康を訪問して朝鮮侵攻反対の意見を述べ、長康もそれに同感ですが、彼らの力では、それを制止できなくなっています。侵攻の結果から見ても、長康や幽斎の緻密な予測の方が、はるかに正当だったのですが、今や秀吉は専制君主同様です。しかも長康は出陣の指令を受けています。幽斎は長康に言っています。《渡海の上は速やかに和議を成立なさる様取り計り肝要に候。》（巻十七）

鶴松に死なれた秀吉は、養子豊臣秀次に関白職を譲り、国内の治安役に任じます。そして前野景定は、その（御付き）の一人に任命されます。長康は自分の治下の総勢をひきいて肥前名護屋へ出陣します。それだけでなく、《四軍監役》の一人として《愚事》と知りつつ朝鮮へ渡海、さんさん苦勞させられています。『武功夜話』巻十八の全部と巻十九のほとんどが、朝鮮における奮闘の記事です。『太閤記』にも、この合戦記事はあるのですが、『武功夜話』における体験者の記録・陳述を拠点にした描写には、リアリティーに満ちた凄愴な迫力があります。

一五九三年の暮、帰国した長康の前には、休む間もない状況が出来していました。長康の渡海中、秀吉には子ども秀頼の誕生がありました。そのため、豊臣家の世嗣をめぐる疑心暗鬼が生じていたのです。この期に及んで長康は、秀次の後見人に任命されます。秀吉は大坂、それから伏見にあり、秀次は聚楽にあつて、両者それぞれ取り巻きが、疑心を増幅してゆきます。『武功夜話』は、二人の間が険悪化してゆく過程を描いて見事です。『太閤記』など問題にならぬのです。両者の間にあつて調停に苦慮する長康の姿が鮮かに浮かんでいます。

秀吉と秀次の対立は、秀次だけでなく、長康を追いつめてゆきます。両者対立の終末は、秀次がおこなった連判状の件です。秀次が臣下に忠誠誓約の連判状をこしらえていたのが、毛利輝元の通報によつて発覚、それには長康の子息景定の名前もありました。しかも後見人の長康は連判状の存在さえ知らなかったのです。彼は責任をとつて、但馬の所領返却、謹慎の生活に入ります。秀次は弁解を許されず、逮捕、高野山に移され自害、景定たち近臣は切腹、秀次の妻妾たちは子にいたるまで処刑。長康は蟄居、けつきよく《お家御取り潰し》になります。そして、草創いらい、あれほど秀吉に尽力した長康に、秀吉の救いの手はさしのべられず、長康は自刃して果てます。例によつて『武功夜話』の描写は、このあたり〈長康側近の体験認識による世界〉に限定して、そこを越

えることがありませんから、事件いらい、秀吉は長康の前に姿を見せず、秀吉の腹心だけが長康をとりまくのが不気味です。また、この事件が、秀次の場合も長康の場合も、一族郎党さまさまなどところく波及する騒動の、リアルな描写の重厚さは、権力というもののもつ不気味を見事に表現しています。近代社会にも、国家権力が残酷に顕現する事件は多々あるのですが、文芸作品として成功しえなかった世界です。

### おわりに

以上述べてきたように、『武功夜話』が傑作たるゆえんの一つは、生身人間の躍動するがごとくりリアルにかつ主人公格の人物たちの性格変化まで見落さず、語り文体をもつて描いた、という点にあるのですが、『武功夜話』が異彩を放つゆえんは、じつは、その構成・作法の特異性にあるのです。以下その分析に入るべきですが、指定紙数が尽きましたので、別の機会にゆずります。

### 註

- 1 鈴木孝庸 「戦国軍記」、『国文学解釈と鑑賞』、昭和六十二年十二月号  
北川忠彦編 『軍記物の系譜』、世界思想社、京都、一九八五年
- 2 拙著 『日本の小説』創世記』、桜楓社、東京、一九八七年  
拙著 『日本小説の美意識』、桜楓社、東京、一九八〇年
- 3 岩波文庫本『太閤記』による。(ただし、私見によって、「至」に「至」という文字を「注」に改め『渥注之麒麟見之如し』とした。)
- 4 吉田養生雄氏訳註『武功夜話』、新人物往来社、東京、一九八七年、による。他の箇所引用もすべて同じ。(ただし、句読点を加えたところがある。一部私見によって漢字を改めた。)
- 5 年齢は通説に従って計算した。他の箇所年齢が示してある場合は数え年である。前野氏一族の年齢は、『尾張国丹羽郡稲木庄前野村前野氏系図』に従ったが、『武功夜話』本文中の年齢と合わないことがある。
- 6 角川文庫本『信長公記』による。

『武功夜話』の研究に当り、瀧喜義、八橋勉、佐野輝男、間瀬博夫、甲斐公明子、土屋八重子の諸氏には、いろいろお世話になった。

『武功夜話』の本文について、吉田養生雄氏の御厚情を得た。

(受理 平成元年一月二十五日)